

## 要旨

## 『佛母經』について

西脇常記、京都

小論で扱う『佛母經』は、歴代の佛典目録には見えない。しかし敦煌からは多くの寫本が発見されており、ある時期にこの地で流行したことが分かる。大正藏の第85巻にはそのうちS2084(1)の寫本が収められている。では、なぜ流布したものでありながら目録に記載がないのであろうか。

方廣鎬主編『藏外佛教文獻』は大藏經典に未收の佛典の翻刻を載せるものであるが、『佛母經』は、その第一輯(2)に取り上げられている。また季羨林主編『敦煌學大辭典』(3)には、1項目を割いてかなり詳しく解説されている。

それらの成果を踏まえながら、以下まず第1章で、『佛母經』のもととなる『摩訶摩耶經』と『佛母經』の構成の概要を述べ、『佛母經』が疑經であることの證を「六大惡夢」に見る。次に第2章で、上記の翻刻の際に用いられなかった敦煌寫本のうちのロシア藏と、ベルリン・トルファン・コレクションに見える寫本を紹介し、さらに第3章で、国立バイエルン圖書館所藏の『佛說小涅槃經』を紹介して、これが敦煌・トルファン出土の『佛母經』に連なる寫本であることを明らかにする。続く第4章では中國國家圖書館所藏の元版『佛說小涅槃經』を移寫し、バイエルン圖書館所藏の寫本が明初のものであることを確認する。また結語においては、『佛母經』がどのような形で傳承されてきたかを考えてみたい。それによって『佛母經』が佛典目録に記載されなかった事情もおのずから明らかになると考える。

## 鄭齊斗の後裔たち——江華學派の基礎的研究——

中純夫、京都

朝鮮において初めて陽明學を本格的かつ體系的に受容したのは鄭齊斗(1649-1736)である。鄭齊斗の本貫は慶尚道迎日縣であるが、その晩年に江華島に隱棲したため、鄭齊斗に始まる學統を江華學派と称する。江華學派を構成するのは鄭齊斗の直接の門人たち、門人の子孫や姻戚、そして鄭齊斗自身の後裔たちである。本論文では鄭齊斗

の後裔として鄭厚一（1671-1741）、鄭志尹（1731-1754）、鄭述仁（1750-1834）、鄭文升（1788-1875）、鄭箕錫（1813-1889）、鄭啓燮（1876-？）の6名を取り上げ、その事績を考察した。具體的には5回にわたる鄭齊斗遺稿の編纂作業や迎日鄭氏の族譜・派譜の編纂事業の實態について明らかにした。

### 藤原通憲「王宮正堂正寢勘文」とその禮圖について

古橋紀宏、東京

藤原通憲「王宮正堂正寢勘文」は、石清水八幡宮に伝えられる文書で、その中に禮圖が四圖掲載されている。この文書は、久安四年閏六月二十一日に、攝政藤原忠通の命により、藤原通憲が上申した勘文の寫しと考えられる。その内容は、大極殿を正堂と認定するために明堂に論及し、また、紫宸殿と土御門内裏南殿が路寢、即ち正寢であり、他の殿舎は小寢であることを論じたもので、そのために明堂圖と六寢制の圖を二圖ずつ引用する。その四圖のうち、『三禮圖』は聶崇義の『三禮圖』であり、『周室王城明堂宗廟圖』と『周室王城宗廟明堂宮室圖』は『隋書』經籍志と『歷代名畫記』に著録される『周室王城明堂宗廟圖』であると考えられる。『周室王城明堂宗廟圖』の撰者は『隋書』に「祁謚」と記載されるが、姚振宗『隋書經籍志考證』は「阮謚」の誤りであるとする。阮謚の禮圖については、鄭玄説と異なるとする記述がある一方で、鄭玄説と一致すると解しうる記述もあり、この点が問題になる。そこで、この勘文に掲載される『周室王城明堂宗廟圖』と『周室王城宗廟明堂宮室圖』を考察すると、鄭玄説と合致する点が見られるものの、全體としては鄭玄説とは異なっており、阮謚の禮圖の特徴と合致する。特に、鄭玄以降の、崔靈恩・皇侃・『禮記正義』・『毛詩正義』の説とは大きな違いが見られる。また、南北朝時代の禮圖の特徴を示している。このことから、この圖は、禮學において鄭玄説が支配的な地位を占める前に成立した可能性が考えられ、鄭玄説の影響力の増加とともに失われた經學説を伝える貴重な史料と考えられる。

### 古本朱子語録について—『朱子語類大全』未收語録書三十七種—

石立善、京都

初期朱子學の形成と展開を考察する際、朱子語録の果たした役割を考えなければならない。本稿では黎靖德編『朱子語類大全』未收の南宋人による古本朱子語録書三十七種を掘り起こし、その編纂事情や存佚を全面的に考察し、朱子語録の古層やその流傳の概

貌を復原してみた。

古本朱子語録は朱子門人の手によるものが最も多く、再傳の弟子或いは後學によって編纂されたものもある。古本朱子語録書を含めた多くの朱子語録の誕生やその流傳は、朱子學派の盛大な勢力によるものではあるが、その根底には儒教における口傳の傳統の中興があると考えられる。

一人の思想家のものとして、朱子語録ほど大量に整理編纂が行われ、そして刊行されたことは、中國思想史上においても類を見ないことである。初期朱子學の成立と發展において、朱子語録は重要な役割を擔ったと言えよう。

## なぜ阿弥陀がウパニシャッドに入ってきたのか—東洋學者（オリエンタリスト）の難問

ウルス・アップ、京都

近年、オリエンタリズムや、西歐によるアジア宗教の發見を取り上げる本が數多く出版されてきている。このような本の殆どは、ヒンズー教あるいは佛教という近代的な分類を過去に當てはめ、西洋によるアジア宗教の發見は、東洋學者による「創造」もしくは「發明」であり、エドワード・サイッド (Edward Said) の見解によればオリエンタリズムそれ自體と同様に、主に 19 世紀の帝國主義と植民地主義によって形成されたもので、本質的に片方向性を持つと論ずる。つまり、西洋は「東洋」を支配したり、コントロールしたり、形成するために、「東洋」を「創造」もしくは「發明」という。この論文では、この想定が間違っていることを示す事例として、西歐によるアジア宗教發見における中心的なテキスト（アンケチールドゥペロン Anquetil-Duperon のウパニシャッドのラテン語譯 1801）の「オーム」という最初の言葉を取り上げ、そこに帝國主義や植民地主義の形跡のない東-西、西-東の複雑な交流を見出す。そこには、遠く過去に及び、また、東西の様々な文學・宗教に廣がって（ベーダ、新プラトン主義、スーフィズム、日本の禪佛教など）、サイッドによって描かれたものとは全く異なるオリエンタリズムの姿が見られる。そこでは、ユダヤ教とキリスト教の神、日本の阿弥陀佛、エジプトのネフ、そしてインドのオームが融和している。

## 玄奘は本当にマトウラーに行ったのか。中國か西洋？ — 中國の遍路者の記録を批判的に読む方法について

マックス・デーグ、カーディッフ

中國人佛教徒の遍路者である玄奘の『西域記』は、印度の佛教についての情報源として、十九世紀以降、西洋の「東洋學者」の注目を集めてきた。それは印度の歴史書の缺如を補う役目を果たすこともあった。この論文は『西域記』におけるコンテキストと情報提示の方法を考察したものである。『西域記』の執筆に当たって、玄奘には正確な指針があり、それは必ずしも宗教的・記録的なものだけではなく、文學の様式や、讀者である中國の皇帝の影響も受けたはずである。この論文では、北印度のマトウラーの例を挙げて、玄奘は、常に自らの目撃に頼っていたのではなく、時には印度遍路の先驅者や佛教資料に利用したこともあったと論ずる。佛教の聖地である印度の具體的で完全な地誌のために、佛教傳説も用いられたのである。この論文では、『西域記』を正しく理解するためには、中國のコンテキストと史的背景を考慮に入れなければならないことを論ずる。

## 天臺智者の「秘教」思想について

李四龍、北京

中國天台佛教の開祖である天台智顛は東洋佛教の中心的な人物の一人である。しかし、中國と韓國の智顛像と違って、日本佛教には智顛が密教佛教僧というイメージが付いてきた。この論文は智顛の密教思想を取り上げる中、日本天台宗の密教との關連を考慮する。

智顛の教判理論にある種の密教的教えを見出したこと、中國佛教の南北朝時代の偉大なる業績の一つである。智顛は六根清淨という位以下（つまり、未だ達せられなかった修行者）の修行者が顯教を廣められるが、密教は廣めてはならない。それに法身は密教の範囲内なので、門外の僧なら傳えたり話したりしてはいけないものと見受けられた。佛法の秘密的な真髓を得るためには修行僧の持戒や呪の修行が必要とされる智顛の四種三昧の三種である半行半坐三昧（普遍三昧と蓮華三昧も含み）である。普遍三昧と蓮華三昧を修行したり、惡を拂い、善を行ったり、そして懺悔したりすることの最終的な目的は六根を清淨にし、秘密の真髓を現し、法身を得るためである。このような根本的な觀念は日本の天台宗の密教的形成に大きく貢獻した上、傳教大師最

澄が円教、密教、戒と坐禪といろいろを融合させ、折衷體である天台宗を作り上げたというわけだからこそ智顛にかかわる密教的イメージができたのである。

## 佛教：中國の現象として

ヘルウィグ・シュミットグリンツァ、ウオルフェンビュッテル

早期の佛教と儒教・道教との論争以來、中國の思想史・宗教史の上では、佛教は外來の宗教であり、中國の文化圏外のものであると見なす傾向があつた。ある意味でこのことは否定できないが、佛教は中國に入ると、中國風に仕上げられ、中國文化の独特の生産物として生まれ變つたことも明らかである。佛教思想における最も顯著で有名な教えである「禪」も、中國にその由來がある。今日でも、禪の形成をめぐる、中國固有の貢獻や、與えた影響の程度が、論争の対象になっている。佛教史について、印度や他國に重點を置き、中國の寄與を輕視する傾向は、文化的誤解を招き、重大な問題になりうる。中國文化の佛教的要素への輕視の原因は、十七世紀に佛教に強く反對したイエズス会の宣教師によるもので、当時、佛教の聖職者たちにたいして「坊主」(Bonze)という輕蔑的な呼び名が使われていた。しかし、中國の文化における佛教の影響の多大さ、また佛教がいかに中心的な役割を果たしてきたかということを考えれば、佛陀の教えへのさらなる注意と意識の高揚を促す必要があるように思う。つまり、中國を正しく理解するためには、佛教が看過できないのである。

## 権力と信仰をめぐるの教訓的な繪畫——八世紀から十世紀までにおける成都の大聖慈寺

エヴェリン・メニル、京都

756-757年に建立された大聖慈寺は、中世中國における最も大きな寺院の一つであつた。唐の皇帝玄宗(在位712-756)の下で創建されたことと、蜀の成都という戦略上の立地のために、皇帝、畫家、佛教の僧や在家の注目を引いた。『益州名畫録』・『成都古寺名筆記』・『大聖慈寺畫記』において、それぞれ異なるが相補的な觀點から述べられていることによれば、大聖慈寺という繪畫の宝庫は、以下の點を反映したものであつた。(1) 變化しつつあつた史的なコンテキスト、つまり、756年と880年における二人の唐の皇帝の左遷、蜀の王氏(907-925)と孟氏(925-965)の佛教支援政策、そして965年と1000年における宋による征服と破滅、(2) 845年における佛教迫害

と、復興後における既存の宗派の多様化と禪宗の發展、(3) 厳しい労働条件と重い道徳的な責任にも拘わらず、多くの畫家達が持っていた藝術的創造性である。この論文では、11世紀の初頭に書かれた資料の分析によって、この華やかであるが既に失われた世界を明らかにし、史的エピソードの主役たちのそれぞれの役目と野望に焦點を當てて、二世紀以上にわたり蜀の社会と全中國の力を集中させた大聖慈寺の繪畫における權力と信仰の重なり合いを検討したい。

### 黄檗宗における苦行

ジェームズ・バスキンド、京都

17世紀の半ば頃、福建省から來日した中國の黄檗僧による幅廣い活動は、江戸佛敎界を根底から搖さ振った出來事であつた。隱元隆琦(1592-1673)を始めとする高僧たちが來日し、明の佛敎を紹介したが、その様式は日本の禪僧が正統的な修行と考えるものとは全く異なるように見えた。当時の日本の禪界にとって一番驚かされた黄檗宗の特色は、中國で流行っていた、禪行の中に唱える念佛、つまり「念佛禪」ということであろう。しかし、黄檗宗の僧侶が將來した、今日ではあまり知られていない修行もあつた。それは様々な苦行である。その主なものは、血書(自分の血で写經することとか)、閉關(數年間、庵や狭い場所に監禁されること)や、指を焼いて佛様に捧げること、そして極端な例としては、燒身行もあつた。この類の行は黄檗僧によって紹介され、一時的には行われることもあつたが、日本の佛敎に根付くことはなかつた。大陸の佛敎文化を憧れがちの日本禪界には、このような苦行は受け入れられなかつた。この點は日中交流上の意味深い歴史的なエピソードである。

### 皇帝、皇太子、そしてその教師——初期帝政中國における權力の理解について ラインハート・エツメリッヒ、ミュンスター

この論文は、皇位繼承における權力傳達の類型を探り、前漢の初めから終わりまでの間に、權力の傳達がどのように理解されていたかを検討する。主な問題點は、皇太子はいつ指名されたのか、どのような基準で選ばれたのか、取り替えられるのか、未來の即位のためにどのような教育を受けたのか、その教師は誰だったのかなどである。その解答は以下のように要約できる。多くの場合には皇帝の在位の後期に皇太子が指名された。指名され次第、通常は重臣たちの輔佐によって、將來の統治の準備が周到

になされた。しかし、実際には、例えば既に指名された皇太子を變えたいという場合などに、在位の皇帝の影響力には厳格な限界があった。このことは、繼續性や傳統、さらに他の皇族の影響力などの要素に對する、皇帝の権力や影響力の實際的な限界を示している。

### ブイルク・カヤ (1197-1265)、モンゴル官吏のウイグル人

マグヌス・キリーゲスコーテ、ツリール

本稿は、「元史」巻125に収録された、ウイグル人のモンゴル官吏ブイルク・カヤ（布魯海牙、Bulu Haiya）傳のドイツ語譯である。

そこには、責任を持って行動し、完全に儒教的なウイグル人官僚の姿が、中國正史の傳統的な書き方に従って描かれている。彼は幅廣い教育を受け、修養を積み、忠實で勤勉であった。公務をきめ細かに達成するとともに、常に市民に對して正當で公平に接した。家族が必要とすることに對してもよく對應ができていた。チンギス・ハーンの下で勤め、モンゴル社会の最高幹部との交流を持ち續けたが、裁判官や行政官を勤める時には、一般の人々の要請を決して忘れなかった。彼らが經濟的に困った時、或いは不當な判決が言い渡された時には、ブイルク・カヤができる限り支援した。最後に、彼は、かつて持っていた肩書き「廉訪使」から「廉」(Lian)を姓に選び、子孫は皆これを用いた。

### 變化のパターン：中華電子佛典協會の「電子佛典集成」に見られる大藏經の文獻

クリスティアン・ウィッテルン、京都

この論文は、中華電子佛典協會 (CBETA) の大正大藏經の電子バージョンを用いて、經の變化におけるパターンを見出すことを試みたものである。そのため、電子佛典 (CBETA プロジェクトを中心として) の目的、方法論、及び進展の概説を提示しながら、文獻上の異同の記述の仕方についても説明する。

各テキストにはそれぞれの文獻史があるため、ここでは、個々のテキストの傳來についてではなく、むしろ、個々のテキストやテキスト群において見られうるパターンとは全く關係のない、テキストの傳來におけるパターンを取り上げる。この點で注目されるのは、異同箇所の数に差異であり、その中でも、唐代に翻譯された密教の文獻

において最も大きな異同が見られる。もう一つの問題点は、特定の文字について特に異同の傾向が強いかどうかという点であり、もしそのような傾向が認められるとすれば、その変異は字の形によるのか、あるいは発音によるのかという点がさらに問題となる。



